所蔵資料蔵出し

父 渋沢栄一 上下巻（実業之日本社）

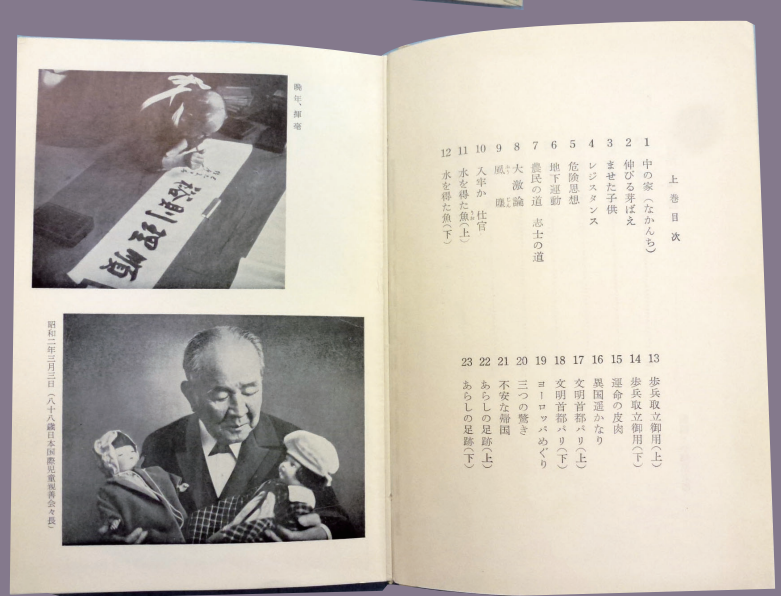
近代日本資本主義の父と呼ばれ、令和６（2024）年から新一万円札の顔となる渋沢栄一を、子である渋沢秀雄が描いています。

昭和34（1959）年3月18日発行（上巻）　4月15日発行（下巻）

高崎城乗っ取り事件

渋沢栄一は、天保11（1840）年、武蔵国（現埼玉県）に生まれ、学問才知があり、弁舌に優れていたため、村のリーダー的な存在でした。そんな栄一ですが尊王攘夷派の志士と親交を持ち、大規模な攘夷を行わなければ幕府は倒れないと考え、高崎城乗っ取りの計画を企てます。しかし、尊王攘夷派にも説得され中止し、栄一は故郷を離れ京都に向かいました。

上巻目次・渋沢栄一写真（下巻）



下巻扉・渋沢栄一写真（上巻）

文明首都での経験

故郷を離れた栄一は、一橋慶喜に仕え次第に認められていきます。その後、将軍となった徳川慶喜の実弟・徳川昭武に随行し、パリの世界万国博覧会や西洋諸国を見聞しました。西洋の発展は想像を遥かに超えており、パリの銀行や会社は大衆の金を集めて大規模な営利事業を営み、その運営が一国の産業を起こし利益を生んでいました。これは栄一が帰国後、「合本法」と称して着手した「株式会社」の種本であり、渡仏は栄一の人生に大きな刺激を与えました。

日本資本主義の父

栄一は、新政府の大蔵省に仕えましたが、辞職し民間の産業を発達させる仕事に取りかかり、手始めが「第一国立銀行」でした。他にも王子製紙や東京海上火災保険など会社設立に関わり、その数は五百件以上といわれ、教育など非営利的な事業についても約六百件に達しています。

（公財）特別区協議会
One23Vol.39(2019 冬号) 掲載